和漢階層語彙オントロジの蓄積・検証・活用—その問題点と可能性—

相田 満
人間文化研究機構 国文学研究資料館

稿者は和漢の古典的類聚編纂物の見出し語を収集・整備するという手法により、オントロジを構築する「和漢古典学のオントロジモデルの構築」(2004-2006 基盤研究(B),研究代表者：相田)プロジェクトを進めてきた。その際に発生した問題点は多岐にわたるが、その本質は今までこのような素材と主題に研究者が向き合ってこなかったことに由来しよう。そこで、本論においては、具体的事例の紹介を通じて、蓄積されるオントロジ資源の可能性と展望を述べたい。

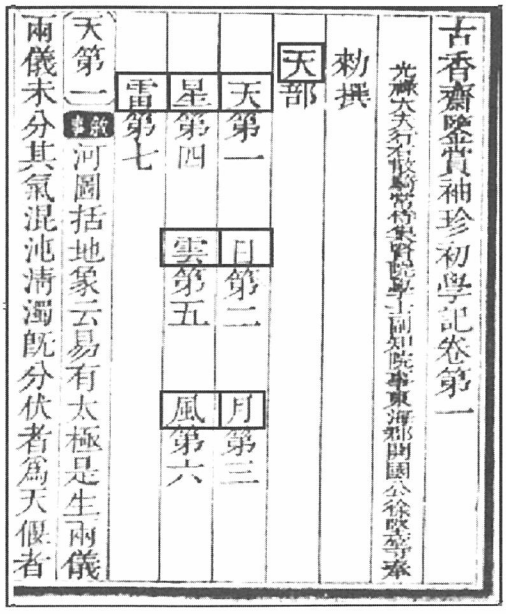
The research for accumulation,verification and to make use of theontorogy that is composed of the classical word vocabulary of stratified Japan, and China － Its problems and possibilities －

AIDA Mitsuru
National Institute of Japanese Literature,National Institutes for the Humanities

I have worked on "Construction of Ontorogicalmodel of the Wa-Kan classics study" project. In this project, we are adopting the method in which collecting and maintaining the headword of a classic compilation thing of Japan and China. Though the problem that occurred in that case includes many things,the essence might be in no the current approach of the researcher on such a subject. Then, I want to describe the possibility and the view of the accumulated Ontoroge resource in the main discourse through the introduction of a concrete case.

1. オントロジ蓄積上の問題点

稿者は、今日的な表現で言うところの情報処理技術は古来紙上で具現化されてきた特性に着目して、類書・辞書・字典・字典・百科全書などに記載される、部類用の見出し語彙に着目し、さまざまな典籍類から前近代における日本と中国(すなわち和漢の古典世界)の分類用概念語彙を収集・整備を進めることで、古典と現代の概念上の接合をはかることを目的とする「和漢古典学のオントロジモデルの構築」プロジェクト(2003 ～ 2005 年度)を進めてきた。


古香齋鑑賞袖珍初學記卷第一
光祿大夫行右散騎常侍集賢院學士同知院事東海郡開國公徐堅等奉
勅撰
天部
天第一
日第二
月第三
星第四
雲第五
風第六
雷第七
敘事
天第一
河圖括地象云易有太極是生兩儀
兩儀未分其氣混沌清濁既分伏者爲天偃者

[図①]構造化された古典籍

オントロジの取材対象となる諸典籍に特徴的なことは、前近代の日本における諸概念が、一定の指針のもとに整理・分類され、上位—下位関係をなす階層的構造を持つ分類用概念語彙(上段傍線部や[図①]に示す□で囲われた部分)を含む見出し語によって制御されていることである。

たとえば、『初学記』(唐・徐堅:等撰,725[開元 15])の見出しを示してみよう。その見出しは、[図①]や以下のように表現されている。

天部
　天第一・日第二・月第三…
歳時部上
　春第一・夏第二・秋第三…
歳時部下
　元日第一・人日第二・正月十五日第三…

このような形で示されている見出から、分類用概念語彙を抽出し、各語が排列されている階層関係を記録し、利用すれば、それがそのまま有用なオントロジ資源として期待されるわけである。

このような特徴は、古典的類聚編纂物に広く見られる傾向である。そこで、プロジェクトにおいては、オントロジ取材源となった、それぞれの典籍の性格に知悉した専門研究者によって、実際にデータ採録作業に携わってもらった上で、各資料の性格と構造を考察するとともに、発表形式による研究協議も重ねた。

メンバーは、王朝仮名文学・漢文学・仏教文学・上代文学・近世文学・中世文学・和漢比較文学・情報学など古典学にたずさわる複数の人文学研究者と、広汎な分野をカバー覆い、研究期間 3 年間で 10 回を超える研究協議において、濃密な時間を過ごせたことは、貴重な経験であった。

そこで、本論では、その総括を兼ねて論じることとする。

①一般的な問題

まず、最初の関門として、入力の問題がある。入力資料は一様ではなく、資料毎に構造の把握と、記載される字様(特に漢字の包摂解釈)が異なる。そのため、業者委託による一括入力になじみづらく、データの蓄積に時間がかかるということがあった。しかし、それでも、収集語彙は 98 種の典拠 20 万件を超えることができた。

中でも、最大ボリュームをほこるものに『古事類苑』(約 4 万 5 千件)がある。これは、初期入力こそ業者委託で行われたものの、その後瑕疵のない状態にまでデータを磨き上げるに、都合 4 回の校正作業と、データ構造の吟味、入力不可能文字の検討と同定を要した。そのため、結局は、初期入力後にも入力時に匹敵する労力と時間がかかったといっても過言ではなく、完成までに、延べ 3 年程度の時間がかかった。

集められた分類用概念語彙は、そのほとんど全てが漢字文字列のみで成り立っているため、漢字の字種不足は『古事類苑』目録部においては深刻な問題で、使用文字種の状況は次の通りであった。

JIS-X0208 以外：715 件(1.69%)
内、UCS3.0 でカバー可能：683 件
　不可能 32 件(0.076%)
　内、今昔文字鏡番号：28 件 30 字
　　今昔文字鏡番号なし：4 件 4 字
(今昔文字鏡は単漢字 10 万字版による)

データ中に情報交換用符号文字の範疇外の漢字が発生する確率は、「動物・植物・金石」において高く、『古事類苑』に限らず、和漢の類聚編纂物において共通する問題である(なお、『古事類苑』では「鳥虫魚類は動物に含まれる」)。

②構造解釈の問題

オントロジの収集対象となった古典的類聚編纂物の一部を分野別に分けると、以下のようになる(一部を示す)。

A.類書・辞書・字書類
　漢)芸文類聚・淵鑑類函他：37 種
　和)和漢三才図会・古事類苑他：12 種
　仏)諸経要集・法苑珠林他：4 種
B.書籍目録
　漢)中国分類法 6 版・(歴代書目 10 種)等
　和)内閣文庫国書分類表・群書一覧等:16 種
C．詩・文・和歌集
　漢)類林新詠・李嶠百廿詠等：3 種
　和)本朝文粋・古今和歌六帖等：11 種
D．その他
　百科全書・現代短歌辞典等：6 種
　　……計 100 種

分野の大半は、儒学(漢学)系のものが最多で、和学系、その他、仏教系がそれに次ぐ。(類書と辞書・字書は、画然と区別し

きれない曖昧な点もあるため、上記においては同一ジャンルと見なした)。

また、データ入力フォーマットは、次の表に示すような形式とした。

[図②]入力フォーマット

入力フォーマット	入力例
成立地域	中国
成立時代	後漢
成立年・年代（西暦）	
撰者	劉熙
書名	釈名
所収位置	巻一
備考	
前置語（第n階層）	釈
第n階層語	天
第n階層語よみ	てん
第n階層語副よみ	
第n階層語付属語	第
第n階層語順位語	一
第n階層語備考	

たとえば、後漢(AD25-220)末の劉熙撰『釈名(しやくみよう)』巻一に最初に登場する見出し「釈天第一」は、[図②]に示すように、

釈／**天**／第／一

という形で入力される。そして、その中から「天」という分類概念語が「第n階層語」に宛てられて抽出されるのである。

実際にデータを入力する際には、[図③]で示すように、正規化された形で入力するようにした。

この方法では、階層が深くなればなるほど、同一階層内で繰り返される文字数が増えるため、一見、入力が面倒だという印象を与える。

しかし、案に相違して、入力時に表計算ソフトを使用することから、複写が容易に行えるので、このフォーマットの方が入力が容易だとの声が高い結果となった。特に、入力後にデータ加工を容易に行いやすいことと、常に構造を意識しながら入力しなくてはならないという点は、入力者がコンテンツの構造の特色についての理解を深めるのに有効であった。

データを入力するに際しては、基本的に同じ階層には類似する形態の分類用概念語が並ぶように配慮した。たとえば、[図③]においては「門名」「目名」がそれに該当する。その結果、同質の特徴を持った語句が、同列に配されることになるわけである。

しかし、必ずしも全てのデータが、きちんと整斉された階層関係を有しているとは限らない。

中には、一つのテキスト内で階層の深さが異なったりするために、上下の階層レベルを同列に合わせることができないようなデータも発生している。

この傾向は、先に示したような資料の分野や、編纂された国によっても異なる。

具体的には、仏教系類書や一部の大規模類書、和歌集などには、必ずしも整斉された構造になっていないものが多く、中国の儒学系類書には比較的整ったものが多い。

[図③]入力例

1	地域・時	撰者	書名	巻設	部そ	部よみ	次第部	門名	門よみ	次第門	門備考	目名	目よみ	目
41	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	四瀆	しとく	
42	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	九沢	きゅうたく	
43	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	五湖	ごこ	
44	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	九江	きゅうこう	
45	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	三江	さんこう	
46	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	九河	きゅうが	
47	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	羲爽之図	かいのず	
48	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	河図之教	かとのすう	
49	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	洛書之文	らくしょのぶん	
50	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	王制九州	おうせいきゅ	
51	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	王制井田	おうせいせい	
52	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	四正	しせい	
53	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	四維	しい	
54	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	卦音風節相配図	かおんふうせ	
55	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	卦音風節相配図	かおんふうせ	
56	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	卦音風節相配図	かおんふうせ	
57	中国・宋	陳元靚	〈新編群書類要〉事林広記	巻二				地理図経	ちりずきょう		門	卦音風節相配図	かおんふうせ	

こうした現象が発生する原因は、類聚編纂物を構成する主体となった学問体系の特質、ひいては思想体系の基盤をなす風土や文化性の違いといった、根本的な次元の事情に由来しよう。

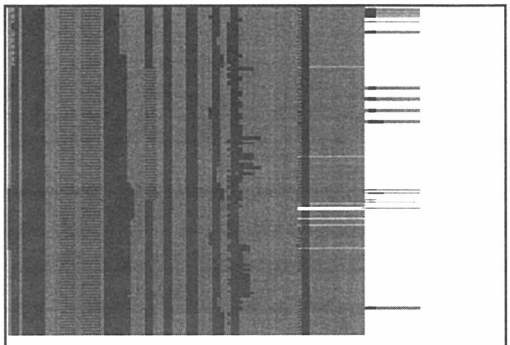
古来、中央集権的原理に貫かれた世界観を構築してきた儒学の観点からは、上下の階層関係が整った類聚編纂物が生まれやすいといえよう。日本や仏教的世界観の反映した類聚編纂物には、一方、多元的価値観を包含しつつ形成された経緯が反映されて、階層関係がやや複雑なものになったとみることもできる。

和書や仏書における類聚編纂物のデータ入力作業は、ある程度データ構造を読み取る作業に習熟した段階でないと、構造を把握するまでに、かなり苦労することになってしまうのが一般的な傾向である。

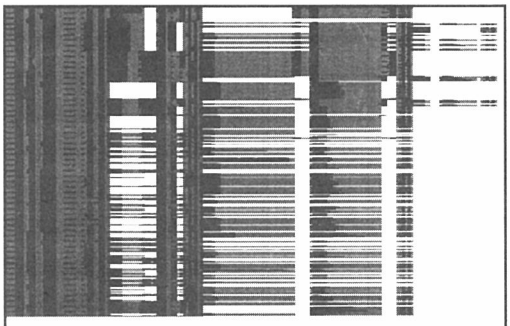
このようにして入力された類聚編纂物における階層構造が、どれだけ整然としたものか、あるいはどれだけ乱れているかということを、中国類書(康・熙帝勅撰『淵鑑類函』,1710)・中国仏教類書(唐・釈道世『法苑珠林』)・和製類書(日本・寺島良安『和漢三才図会』,1712)の観点からサンプルを採って、ビジュアルに示すことを試みたものが[図④]～[図⑥]である。

これらは、[図③]の体裁で入力されたデータに対し、セル中に文字列が存在する時には当該セル全体に色を塗って強調し、データがないものはそのまま白地で表示させるようにしたものを冒頭から 1,300 件分を抜き出して縮小表示させたものである。

簡単な方法ではあるが、この図を見ると、中国類書『淵鑑類函』が、明らかに他の 2 つと異なっており、色ムラの少ない様相を呈している。これは、同書が上下の階層関係をきっちり意識した、整斉された構造を持ったものであるという特色によるものである。



[図④]『淵鑑類函』(中国類書)



[図⑤]『法苑珠林』(中国仏教類書)

[図⑥]『和漢三才図会』(和製類書)

なお、和歌などでは、目次と中味との異同が大きいものなど、テキストクリティークに留意を要するものが目立った。これについては、たとえば

『新撰和歌六帖』目録版
『新撰和歌六帖』帖ごとの目録版
『新撰和歌六帖』本文版

のように、別作品と同様に扱った。

③同名異物の問題

また、ある名称が国や地域によって全く

別のものを意味するものに受け止められていることについて、いかに対応するべきかということも問題である。

このように、コンテキスト内で単独で意味のある概念になるものをロール概念[1]とも呼ぶが、和漢の古典オントロジにおいては、魚・鳥・植物名などで顕在化する問題である。

たとえば、魚類では「鮎」が中国では「ナマズ」のことをさすのはよく知られること。そのため、『爾雅』釈魚にある「鮎」と、『古事類苑』動物部 16 魚上の見出に立項される「鮎」とは、厳密には一致しない。

この問題を解決するために、学名をキーとして同定する方法も考えられるが、中には、「鶯」のように、文芸と深く結びついた言葉もある。その場合は、その国々の風土のコンテクストに依存した文学表現の解釈レベルにまで配慮する必要があり、必ずしも適切な解決法にはなりえない。

日本で「鶯」と呼んでいる鳥は、中国では「皇」にあたる。しかし、「皇」と「鶯」という鳥は、実は字を変えただけで、要するに春告げ鳥という点で共通点する。

ところが、中国で「皇」といえば、「黄鸝」とか「黄鳥」をいい、非常に大きな鳥でヒヨドリぐらいの大きさがある。これは「高麗鶯」とも呼ばれ、たとえば西湖十景に「柳浪聞鶯」という鶯を聞く名所まであるが、これは日本で認識されている「鶯」とは全く別のもので、日本のように梅との取り合わせは成り立たない。

中国の漢詩(たとえば杜牧「江南春」など)で詠われる鶯（黄鸝）は、日本に輸入されて、日本の鶯にとって代わる形になってはいるが、実は日本にも中国にいるのと同じ「高麗鶯」は生息しているのである。

そのため、中国人が日本文学作品における鶯を扱う際にイメージしている鳥は、実は「高麗鶯」であったという認識のズレが発生しているのである[2]。そのため、唐・白居易『白氏六帖事類集』巻 29 に見える、

鵲・鸜鵒・鶯・鷰・雀

と、明治期に編纂された『古事類苑』動物部 11・鳥 4 における

喉紅鳥・連雀・鶯・菊吸・啄木鳥

は、それぞれ異なる実体が扱われていることになるのである。

このような現象を切り分けて考えるナビゲーションを実現するためには、当該語が、地域・時代情報までにをも属性に含み込ませた体系樹下に格納することにが配慮されたオントロジが想定される必要があろう。

2. 用語間の関係・継承性・特性について

先述の通り、和漢古典籍においては、何度も編纂された類概念（分類概念語彙）によってまとめられた辞書や事典（類書など)、さらには書名標題に使用される形態素的語彙が、きわめて継承性の高いオントロジの宝庫となっている。これらのオントロジの実体は、類書・辞書などの見出しや部立てなどに使用される語句から、付属語を取り去り、そこから分類用概念語彙を抽出して、あるがままに集積したものである。これらの語彙は、きわめて高い継承性を持つだけでなく、現代語との関連性においても、自然景物・年中行事・人事関係の語彙を中心に平均 1/4 以上の一致率を示していることは、以前にふれた[3]。

今回さらに検証してみたことは、見出し用に使用される語彙が、古典文に使用される実態を反映するものであるかという点である。

たとえば、『枕草子』(岩波古典文学大系本[三巻本系]を使用)本文中の語句における共通語彙の一致率は、他の辞書間の語彙一致率よりも全体的に 5 ～ 10%程度上回る値を示す[図⑦]。

地域・時代	撰者	書名	件数／一致率	全覧	類名	北堂書鈔	芸文類聚	初学記	李嶠百廿詠	事類賦	和漢朗詠集	[枕草子]	分類語彙表	書名 件数／異語（のべ数）
中国・隋	文帝	全覧		2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	/2(2)
				2	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	
中国・漢	劉配成	類名		0	27	3	6	5	3	7	2	7	15	/27(27)
				0%		11.11%	22.22%	18.52%	11.11%	25.93%	7.41%	26%	55.56%	
中国・唐	虞世南	北堂書鈔		0	3	847	123	85	39	26	7	82	170	/847 (874)
				0%	0.35%		14.52%	10.04%	4.60%	3.07%	0.83%	9%	20.07%	
中国・唐	欧陽詢：等	芸文類聚		0	6	123	745	124	88	87	33	182	174	/745(773)
				0%	0.81%	16.51%		16.64%	11.81%	11.68%	4.43%	24%	23.36%	
中国・唐	徐堅：等	初学記		0	5	85	124	338	80	84	31	107	120	/338(340)
				0%	1.48%	25.15%	36.69%		23.67%	24.85%	9.17%	31%	35.50%	
中国・唐	李嶠	李嶠百廿詠		0	3	39	88	80	132	63	22	73	64	/132(132)
				0%	2.27%	29.55%	66.67%	60.61%		47.73%	16.67%	55%	48.48%	
中国・宋	呉淑	事類賦		0	7	26	87	84	63	111	27	80	55	/111(116)
				0%	6.31%	23.42%	78.38%	75.68%	56.76%		24.32%	69%	49.55%	
日本・平安	藤原公任	和漢朗詠集		0	2	7	33	31	22	27	131	59	59	/131(134)
				0%	1.53%	5.34%	25.19%	23.66%	16.79%	20.61%		44%	45.04%	
[日本・平安]	＊清少納言	＊枕草子		0	7	82	182	107	73	80	59	3492	1299	/3492(19644)
				0%	2%	5%	3%	2%	2%	2%	2%		37%	
日本・現代	国立国語研究所	分類語彙表中の漢字語彙		0	15	170	174	120	64	55	59	1299	17,835	/17,835(22,608)
				0%	0.08%	0.95%	0.98%	0.67%	0.36%	0.31%	0.33%	6%		

[図⑦]概念語彙の継承性について

方法は次の通りである。まず、仮名漢字交じり文という日本語の特質に注目して『枕草子』本文データから1字以上の漢字列を抽出する[図⑧]。次に、全部の文字を新字体に変換する前処理を施したで、『枕草子』中から抽出した漢字文字列 3,492 件との一致率を求めた。

[図⑧]漢字列抽出

★春
は
★曙
、やう／へ
★日
くなりゆく
★山際
すこしあかりて
★紫
だちたる
★雲
の
★細
くたなびきたる。
★夏
は
★夜

この一致率の高さは、未知の分野の古典本文に対して既存の類聚編纂物を媒介とした情報ナビゲーションを行うことが有効である可能性を示唆してくれている。また、この語彙一致率には、テキスト毎に差異も見える。このことは、当該テキストがどのような形で読まれたかという、受容の在り方と密接な関係があるようで、たとえば『源氏物語』の注釈書『河海抄』に『枕草子』が頻用され、注釈の文脈においては『枕草子』が有職書として考えられていたことは、そのような特性も預かっていることも関連があるものと考えられよう。

3.漢字語彙の抽出と蓄積・活用法

このような方法を前近代における日本の文字文化全体に適用するためには、どうすればよいだろうか。

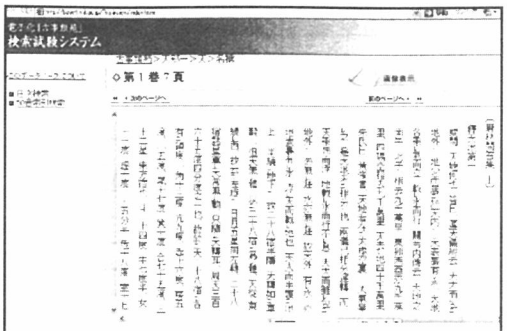
日本に残存する前近代の典籍の過半は（総量的には約9割近くか）、漢文典籍（含日本漢文）と仏書で覆われていたと考えられる。そのため、まずは文献を解析するための熟語語彙を集積する必要がある。そのための資源は、既存の辞書では不足するため、実際に使われていた文献から拾い出す必要がある。

この目的のために整えてきたデータに『古事類苑』がある。

当該データは、漢文の返り点まで忠実に再現した入力手法を採った結果、漢字列のみで構成される文献でありながら、熟語語彙を抽出することが可能となった。

```
V 類聚名義抄
N 四大
H <ruby><rb>天</rb><rt><M7f00-000b-1817></rt></ruby> 〈秦堅反/ハ
W 段注説文解字
M 一上一
X 天顛也、 〈此以【K二】同部疊韵【K一】爲【KL】訓也、凡門闕也、
皆於【K二】六書【K一】爲【K二】轉注【K一】、而微有【K二】差別【
【K一】、蓋求【KL】義則轉移皆是、擧【KL】物則定【KL】名難【K
一】、始者女之初也、以爲【K二】凡起之備【K一】、然則天亦可【KL
【KL】食、皆曰【KL】天是也、 〉至高無【KL】上从【K二】一大【K
於【K二】六書【K一】爲【K二】會意【K一】、凡會意合【K二】二字【
〉
```

[図⑨]『古事類苑』ソース



[図⑩]『古事類苑』公開版

当該データは、国文学研究資料館と国際日本文学研究センターからその一部(天部)公開されているが[4]、現段階で入力されているデータに引用される文献類の内訳は末尾資料に挙げる[表①][表②](末尾掲載)の通りとなっている。

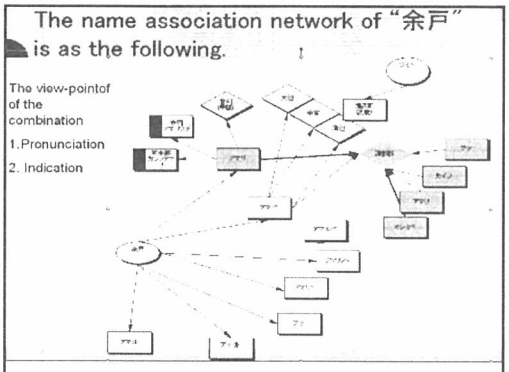
天部で最も頻用されるのが『日本三代実録』である。これは、同書において天象・災異記事が比較的網羅的に出現するからであろう。また、引用頻度上位に『万葉集』が挙がっていることからは、同書が初出記事をなるべく掲載する方針であったものと考えられる。

歳時部では鎌倉時代の高辻長成の著になる故実書『元秘別録』(『元秘抄』)が頻用されるが、現代の研究者が同書を使用する機会は少ない。年中行事に関する記事を例示する必要からであろうが、今では『延喜式』や『西宮記』の方が頻用されることの方が多い。

この結果は、洋装本で 51 冊という全体からすれば、この結果はごく一部にしかすぎないが、それでも引用書の使われ方と内訳を眺めてみるだけでも、『古事類苑』に反映される古典学のありようは、現代の古典学とは少し性格を異にしたものであったのではないかという予感がしてくる。

このように『古事類苑』は、前近代の古典学の総体を具体的に明らかにするための資料として、有用性を増しつつあるのだが、さらに、このようにして蓄積される資源を利用して、現在準備を進めているプロジェクトに、地名分析への応用がある。

★　これは、地名に形態素解析を施し、それを和漢オントロジを使用して分析するというものである。このことにより、類縁性のある地名群を析出し、地域文化・風土の共通性が確認しようとするもので、実地踏査による検証作業と合わせ、現在、類縁関係にある地名のクラスタ化[図⑪]のために、『大日本地名辞書』収載の地名データを解析するための準備[5]を進めている所である。この成果については後日を期したい。



[図⑪]地名のクラスタ化(概念図)

参考文献

[1]溝口理一郎,オントロジー工学,オーム社,2005
[2]2005 年 11 月 25 日,杤尾武氏発表,「『古今図書集成』に収録される「鳥」」(相田満「和漢古典学のオントロジモデルの構築　オントロジ分析ツール・データ・研究記録」[研究成果報告書付録 CD-ROM])。
[3]相田満,古典的オントロジ資源の可能性—和漢古典学のオントロジ,人文科学とコンピュータシンポジウム論文集,2005-3
[4]古事類苑（天部・地部）の全文入力と Wiki 版の試行－前近代の文化概念の情報資源化－,山田奨治・早川聞多・相田満,情報処理学会研究報告,CH-72,pp39-46(8),2006
[5]"Construction of the Gazetteer of Japanese Place Names based on Humanities GIS",Ikuo Oketani,PNC (Pacific Neighborhood Consortium) 2005 Annual Conference in Conjunction with PRDLA, and ECAI, University of Hawaii at Manoa, Program Book, pp.18 - 18, pp. 1 - 24(CD-ROM), October 31 - November 3, 2005

表①『古事類苑』天部引用書類度順	
件数 （総計308種1,912件）	天部（全333頁） 引用書名（上位順）
126	三代實録
93	萬葉集
92	日本紀略
75	續日本紀
73	日本書紀
72	吾妻鏡
65	類聚名義抄
50	百練抄
49	倭訓栞
45	倭名類聚抄
41	扶桑略記
34	箋注倭名類聚抄
33	枕草子
32	和漢三才圖會
26	夫木和歌抄
24	八雲御抄
23	續日本後紀
23	日本釋名
23	文徳實録
23	和爾雅
22	源氏物語
22	古事記
19	東雅
19	書言字考節用集
19	古今和歌集
18	萬寶鄙事記
18	中右記
17	本朝世紀
16	段注説文解字
15	玉海
15	新撰字鏡
15	撮壤集
13	古今和歌六帖
12	物類稱呼
12	北越雪譜
11	日本後紀
11	塵袋
11	古事記傳
11	下學集
10	運歩色葉集
10	甲子夜話
10	武江年表
10	改正月令博物筌
9	晉書
9	延喜式
9	小右記
9	台記
8	類聚國史
8	藻鹽草
8	左經記
8	吾妻鏡脱漏
7	釋名
7	看聞日記
7	千載和歌集

表②『古事類苑』歳時部引用書類度順	
件数 （919種5,782件）	歳時部（全1,490頁） 引用書名（上位順）
170	元秘別録
131	延喜式
125	百練抄
106	書言字考節用集
105	倭訓栞
98	續史愚抄
96	一代要記
78	萬葉集
77	皇年代略記
72	東都歳事記
65	中右記
64	西宮記
62	伊呂波字類抄
60	日本歳時記
58	皇代記
54	三代實録
51	御湯殿の上の日記
50	玉海
48	公事根源
47	源氏物語
47	古今要覽稿
46	吾妻鏡
45	改正月令博物筌
44	古今和歌集
44	後水尾院當時年中行事
43	扶桑略記
42	類聚名義抄
40	江家次第
38	年中行事秘抄
37	類聚國史
36	富胤卿記
35	秡苑日渉[村瀬栲亭]
33	守貞漫稿
33	年中行事大成
33	園太暦
32	享保集成絲綸録
32	故實拾要
31	榮花物語
31	公卿補任
31	親長卿記
31	年中恒例記
30	東雅
29	台記
28	下學集
28	光臺一覽
28	小右記
27	年中行事故實考
26	和爾雅
25	運歩色葉集
25	枕草子
25	長秋記
25	幕朝年中行事歌合
24	世諺問答